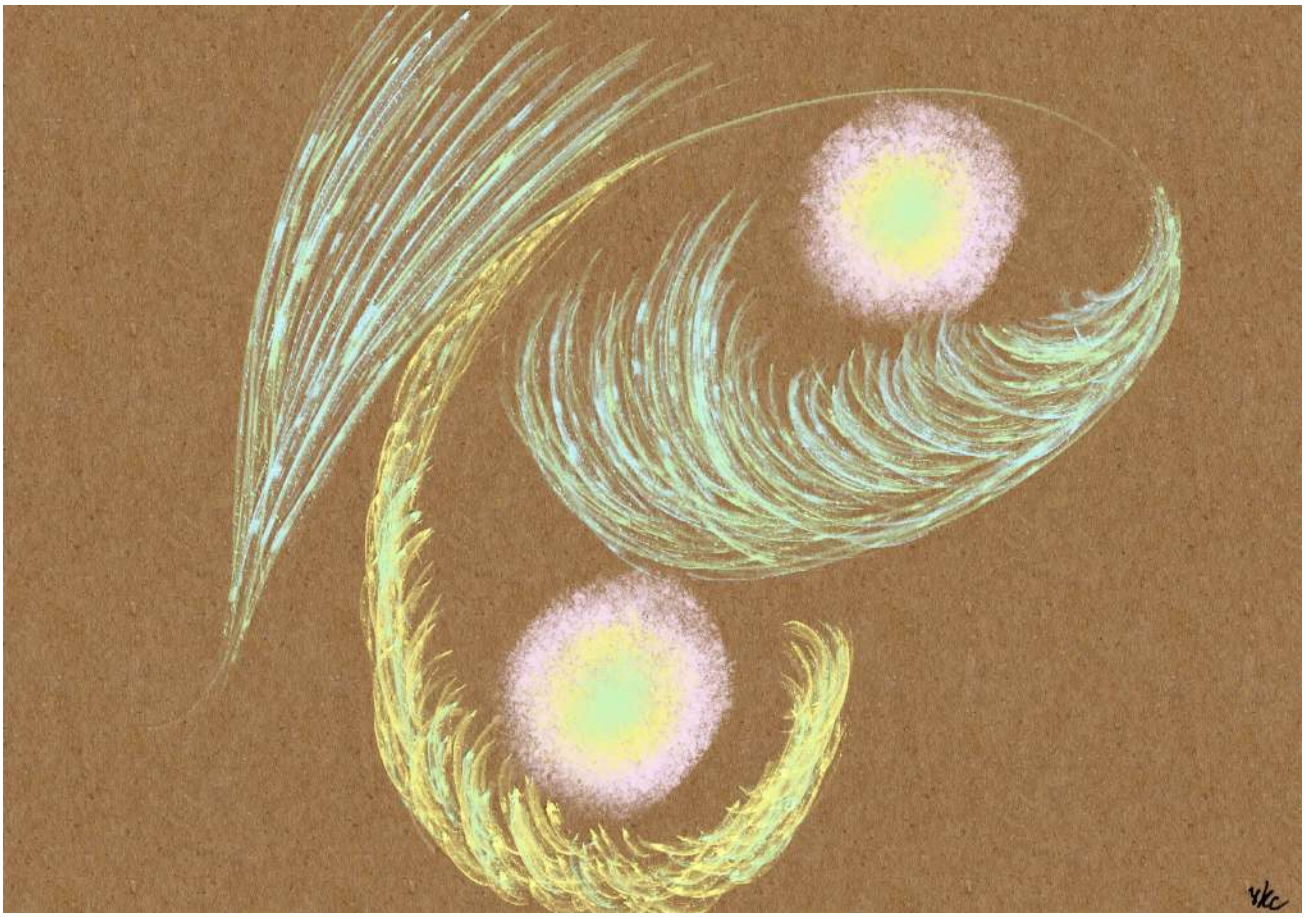
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 315

Website:「発達理論の学び舎」



No.1430 音の癒し_Healing Sounds

© YOHEI KATO 2020

目次

6281. 共通感覚/次世代中心主義を超えて/在ることの感覚と不在の力
6282.『さらば青春の光 (1979)』と『21グラム(2003)』を見て
6283. “Unacknowledged: An Expose of the World’s Greatest Secret (2017)”を見ながら/多様な時間が交錯する奇跡
6284. EUを客体化すること/現代人が患う不安症
6285. これまでの革命と現代の革命の特徴/GAFAの試み
6286. 今朝方の夢
6287.『A(1998)』と『A2(2001)』を見て
6288. ホテルの予約を終えて/オピオイド蔓延社会の到来
6289. 今朝方の夢
6290. ロイ・バスカーが提唱したいくつかの誤謬について
6291. 実在世界に自己の拠り所を見出すこと
6292.『彷徨える河(2015)』を見て
6293. “Unacknowledged: An Expose of the World’s Greatest Secret (2017)”を見終えて
6294. 今朝方の印象的な夢
6295. 超越世界に基づいて/沈みゆく船/必然性と学びと発達
6296.『アンネ・フランク:生存者が語る「日記」のその後』『さまよえるWHO:米中対立激化の裏側』『FAKE』を見て
6297. ″Regular Heroes (2020)“の第1話を見て/落ちていくところまで落ちること
6298. 今朝方の夢
6299. 多様な危機とメタ的な危機/「反成長」/「実際的なイデオロジー」
6300.『her 世界でひとつの彼女(2013)』と『オートマタ(2013)』を見て

6281. 共通感覚/次世代中心主義を超えて/在ることの感覚と不在の力

時刻は午前11時を迎えた。今、書斎の窓を閉めた。というのもこの時間になっても気温がほとんど上がらず、冷たい空気が入り続けていたからである。

先ほど、ロイ･バスカーの主著“Dialectic: The Pulse of Freedom”の再読を終えた。そうした読書をしながら、ふと昨日見た映画についてまた色々と考えていた。1つには、クリント･イーストウッド監督が描く共通感覚に関するものである。彼の作品には一貫して、人種や宗教観を超えて、人間として抱く人類に共通の感覚を描いているように思えたのである。

昨日鑑賞した『硫黄島からの手紙 “Letters from Iwo Jima (2006)”』で言えば、あるアメリカ兵と彼の母との手紙のやりとりが描かれており、それと同じことがある日本兵を対象にして描かれていた。そこには人間に共通する感覚が描かれており、それはひょっとすると、他の生物においても持ち得る感覚なのかもしれない。そうした共通感覚がますます希薄なものになっていく現代社会において、イーストウッド監督の問題提起は重要に思える。

昨日は、『11･25自決の日　三島由紀夫と若者たち(2012)』という映画も見ていた。その映画についても1日経って改めて思い出してみると、作品の中でも言及されていた「後に続く者を信ず」という言葉を、5年ほど前の日記の中で引用していたことを思い出した。それは神風特攻隊の言葉であり、この言葉をその時に引用した時も三島由紀夫の何らかの文章を読んだ後だったように思う。当時その言葉を引用した自分と今の自分に共通している感覚、ないしは当時よりも育まれた感覚は、子々孫々を思って事を為すことの大切さのように思える。

昨今の次世代中心主義的な種々の発想や行動はどこかおかしいのではないかと思う。自分の世代さえ生き残ればそれで安心というのは、視野も器も狭く、精神病理的な症状なのではないかとさえ思う。現代社会が直面する種々の問題を、子々孫々まで射程に入れて取り組んでいくという最低限のことを改めて問う必要があるように思える。そうでなければ、人類は本当に近い将来滅亡してしまうだろう。

これから少しばかり作曲実践をして、近所のスーパーに買い物に行く。来週の今頃は、もう日本にいる。一時帰国の日が近づいてきたので、ここからの買い物は出発日から逆算したものにして、不要なものを購入しないようにする。今日購入するのはニンジンとバナナだけだ。

この世界に在ることの確証を得ようとする試みとしての創造衝動、そして、この世界に在らんとする試みとしての創造衝動。そうした衝動が自己の内側に湧き立っているのを日々感じる。在るという確証を通じて世界と繋がろうとする自己。世界と繋がるためには、当たり前なのだが自己が在る必要がある。ただし、ここで述べている自己が在るという感覚は、在りや無しやの自己感覚であり、絶えず不在の不在化を通じて立ち現れる自己を見つめているという感覚である。

先ほどバスカーの書籍を読みながら、不在があるからこそより完全なものに向かっていくということを改めて思った。不在には因果力があり、不在であるものは現実に存在しているものにすでに影響を与えているものもある。不在のものを不在化させていくことによって、自己も社会も、永遠に到達することはできないが、より調和の取れた完全なるものに向かっていく。逆に言えば、不在の不在化を怠れば、その運動は止まってしまうということだ。フローニンゲン:2020/10/1(木)11:14

6282.『さらば青春の光 (1979)』と『21グラム(2003)』を見て

時刻は午後4時を迎えた。今日もまた2つの映画作品を見た。1つは、『さらば青春の光 (1979)』(原題:Quadrophenia)という映画である。この作品は、1960年代のイギリスを舞台にした、当時流行していた「モッズ」と呼ばれる若者たちの生き様を描いている。

ここ数日、日本の1960年代や1970年代を描く作品を見ていたこともあり、イギリスの当時の社会状況がいかなるものであったかを知りたかった。イギリスにおいても、旧態依然とした社会の有り様に対して若者たちの感情が鬱積しており、やり場のない憤り、そして彼らはたむろしながらも各人はなんとも言えない孤独を抱えているように映った。

彼らの生き方はとても衝動的であり、刹那的でもあった。そのようなことを思いながら、当時のイギリス社会の背景についての描写がほとんどなかったこともあり、そこだけが残念だった。あくまでも若者たちの鬱積感と衝動的な行動だけが映し出されていて、彼らがあのような行動に及ぶ社会的なコンテクストを暗にでもいいので示してくれると有り難かった。

次に見たのは、『21グラム(2003)』(原題:21 Grams)という作品で在る。これは、メキシコ人の才イニャリトゥ監督が製作した作品であり、余命1カ月と診断されて心臓移植の提供者を待つ主人公のポール、夫と娘たちと幸福な生活を営むクリスティーナ、そして神への強い信仰心を持つ前科者であるジャックが、ある事件をきっかけとして3人の人生が交錯していく物語である。この映画は様々なことを考えさせてくれる内容だった。人は死ぬと体重が21グラムだけ減るという。それは5セント5枚分だということが述べられていた。

その重みとは一体何なのだろうか。ここで述べている重みとは、物質的な重さのことではもちろんない。そこには物質的なものを超えて、実に様々な重みが内包されているように思う。その人の人生そのものの重み、そしてその人を取り巻く残された人たちの人生の重み。作品の中で、「それでも人生は続く」ということが何度か述べられていた。まさにそうなのだ。

残された者たちの人生は続き、亡くなった人の命の重みはその人の人生全体の重さに加えて、残された全ての人たちの人生も背負っている。そうした重みに命の尊さや人の尊厳なるものがあるのかもしれない。そして、そうした重みを起点にした発言や行動が求められているのではないだろうか。

人間について、そして社会について全く何も知らないという感覚が、映画やドキュメンタリー作品を見ることに導いていった。この道もまたとても長く複雑なもののように思える。少しずつの歩みを進めていくこと。それは映画やドキュメンタリーの鑑賞においても同じである。

スペインの哲学者ホセ·オルテガ(1883-1955)の思想は、「生の理性」を中心主題にして形成されていることを先日知った。生の理性とは、1人1人の有限な生を媒介して、より普遍的なものに高めていく理性のことを指す。このような発想は、森有正先生の思想形成においても見られるように思える。また、オルテガと森先生の思想形成における自己表現のアプローチもとても近しいものが見られる。オルテガは、ただ欲求に従って生き、自らの権利を主張しながらも、一切の義務を果たそうとしないような人間たちのことを「大衆」として括った。先ほど見た『21グラム(2003)』の中の登場人物であるポールもジャックも、オルテガの述べるような大衆ではなく、彼らは自らの義務を果たそうとする高潔さを持っていたように思う。フローニンゲン:2020/10/1(木)16:23

6283. “Unacknowledged: An Expose of the World’s Greatest Secret (2017)”を見ながら/多様な時間が交錯する奇跡

時刻は午後7時半を迎えた。昨日より、Amazonプライムのオリジナル作品である“Unacknowledged: An Expose of the World’s Greatest Secret (2017)”というドキュメンタリー番組を視聴している。端的には、このドキュメンタリーはアメリカが戦後から現在にかけて行なっている地球外生命体の探索の実態を取り上げたものである。UFOや地球外生命体と言うと、ひょっとすると一般人の中には、それらの存在をSFのようなものやオカルトのようなものと捉えている人が多いのかもしれないが、現代の科学の発展により、むしろそれらの存在を認識し得ないことの方がオカルト的発想と言えるかもしれない。

それを確証づけるような内容を取り上げているのがこのドキュメンタリー番組である。これまでアメリカでは、国民が仰天してしまい、混乱に陥らないように、巧みにマスメディアを操り、少しずつ情報を出してきたことがわかる。この番組が作られ、そして世に提供されたことも何かしらの意図があるに違いないが、アメリカの国家諜報機関と政府があれほどまでに地球外生命体の存在を裏付けるデータを取得しているとは思わなかった。とりわけ地球外生命体の探索とその情報隠蔽に加担していたのは国家諜報機関であり、興味深かったのは、大統領でさえそれらの情報を深く知り得ない立場にいたということである。

端的には、アメリカの大統領というのは単なる一時的な雇われ従業員のようなものであることが見えてくる。であるがゆえに、そのような一時的な雇われ人間に国家機密を明かすことができないというのは考えてみれば当然である。

今はまだ番組の途中までしか視聴していないが、ちょうど半分辺りまで見終わり、直前に見ていた内容が、カネによる巧みなメディアコントロールと裏金を通じた口封じに関するものである。アメリカの軍事予算が膨大なのはよく知られていることだが、表に出ない形で地球外生命体の探索調査には軍事予算を遥かに超える予算が当てられていることにも驚いた。

明日もまた番組の続きを視聴していこうと思う。地球外生命体については、これまではそれらの存在がいないことが前提で調査探索が進められていたが、ある時期を境に、その前提が180度転換

し、それらの存在がいる前提で調査探索が進められるようになったことを最後に明記しておきたいと思う。宇宙の広大さや性質、そして地球外での生命の発生確率などを考えれば、地球外生命体が存在しないと考える方が本来難しいのだが、そうした当たり前の計算ができないように情報操作と信念体系の構築を促されたのが多くの現代人なのだろう。

それにしても今日はとても寒かった。日が沈むのが早くなり、もうほとんど真っ暗だ。このような真っ暗な世界の中で、他の人々、そして他の生物たちはどのように過ごしているのだろうか。動物学者フォン･ユクスキュル（1864-1944）が提唱した「環世界（Umwelt）」という概念について考えさせられる。

ユクスキュルは、アリにはアリの世界が、犬には犬の世界が、ヒトにはヒトの世界があり、それらの間に優劣はないのだということをその概念を用いて提唱した。簡単に言えば、生命はそれぞれ異なる時空間を生きているのである。そしてもちろん、それらが交差することもある。

バスカーが提唱した「存在論的な階層構造（ontological stratification）」の考え方を用いれば、異なる生命に異なる時空間があるという種類の問題だけではなく、そこに階層的な次元の存在も認めることができるだろう。そのように考えてみると、私たちは本当に多様な生命たちと共に入り組んだ時空間を生きていることがわかる。それらは互いに独立しながらも、共有している時空間もあるだろうし、それらの時空間が交錯することによって影響を与え合うこともあるだろう。

「存在論的な階層構造（epistemological stratification）」の考え方だけを用いると、どうしても人間中心的な発想や議論に陥りやすい。それを防ぐ上で、ユクスキュルの環世界という概念や、バスカーの存在論的な階層構造という概念は重要な役割を果たすだろう。

1人の人間の中に固有の時間が流れているだけではなく、1人の人間には多様な時間が流れている。人生は本当に多様な時間の流れの織物なのだということがわかる。そして、個人の多様な時間の流れとしての人生が、他者や他の生命たちが持つ、これまた多様な時間の織物と混じり合っていく。それは多様な時間が交錯する奇跡だと言えるのではないだろうか。小雨降る夜空を眺めながら、そのようなことを思う。フローニンゲン：2020/10/1（木）19:51

© YOHEI KATO 2020

6284. EUを客体化すること/現代人が患う不安症

時刻は午前5時半を迎えた。起床してくすぐに寝室の窓を開けようとすると、窓に水滴が付着していた。どうやら外と内の気温差が随分とあるらしい。確かに今日も非常に肌寒いのだが、暖かい格好をして、今も寝室と書斎の窓を開けて換気している。空気の入れ替えは様々な点で重要である。

起床直後にふと、日本だけではなく、EUも沈みゆく船なのではないかと思った。問題は違えど、どちらも共に茹でガエルようなような形で徐々に崩壊の方向に向かっていることを直感的に感じている。その直感は、政治経済的な問題から来ているように思う。EUの政治経済的な状況は楽観視できるものでは決してない。

これまでの自分はEU内で生活をしていながら、EUの種々の問題に対してあまりに無自覚であり、それらの問題を生み出している構造を全く理解できていなかった。自分が所属している集団を客体視することはなかなか難しいということがここからもわかる。ハーバマスを含め、EUの問題を指摘する論客たちの論考を参考にして、実際に今EU内で起こっている問題を見ていこうと思う。物理的にそこにいることによってその場に働いている力や問題に盲目的になり、そこから離れることによって初めてそれらが自覚できるようになってくるというのは過去にも起こっていたことである。

最初の体験は、日本を離れ、アメリカに渡ったことにより、初めて日本が客体化されたというものであり、そこから今度は欧州に渡ることによって、初めてアメリカが客体化されたというものだった。今度は、EUにいながらにしてそこで行なっている問題とそれを生み出す構造を客体化させていくことが求められている。今回は幾分新しい挑戦になるだろう。

沈みゆくのは日本やEUだけではなく、地球全体なのかもしれない。今回のコロナの世界的な蔓延を受けて、世界的に不安が渦巻いている。民衆の不安が鬱積することによって、ファシズム的な運動が起こったというフランクフルト学派の指摘を思い出す。

世界中の人々は、コロナだけではなく、今様々な不安を抱えて生きているように思えてくる。現代人は不安症という病を患っている可能性が高く、それが閾値を超えると、各国でファシズム的な運動が起こってくるかもしれない。日本の状況を見ていると、日本も例外ではなく、むしろその危険性が

高い国なのではないかと思う。コロナに対する民衆の反応や、孤独死や自殺などの不安と密接に関わった問題の状況を見ているとそのように思う。

私たち1人1人できることは何なのだろうか。個人としては、少なくとも何に対して不安を感じているのかという特定と、その不安が生じるメカニズムを明確にしていくことが求められるだろう。それは幾分認知的な力を要するが、それをしなければ、得体の知れない不安に苛まれ続けるだけである。

臨床心理学の観点で言えば、人は得体の知れないものに不安を覚えるのだから、得体の知れないものの姿を少しずつ明るみにしていく必要があるだろう。また、往々にして不安というものは、マスメディアを含め、社会が生み出すものでもあるから、社会からのメッセージには注意深くなり、社会から押し付けられる視点や世界観を対象かし、そこから抜け出していくことを絶えず意識することも大切だろう。決してそれらに埋没してはならないということを思う。フローニンゲン:2020/10/2(金)05:53

6285. これまでの革命と現代の革命の特徴/GAFAの試み

昨夜ふと、革命について考えていた。先日、連合赤軍や三島由紀夫を描いた映画を見たことによって、革命についてふと考える瞬間が訪れたのだと思う。古くはフランス革命など、革命と称される事件や、1970年代まで日本で行われていた革命的な運動は、どれも物理的な次元での武力行使が伴っていた。私が生まれたのは、そうした革命的な運動が沈静化し、革命なる言葉が死後になっていた時代である。

それゆえ、革命がなんたるかは体験を通じて理解できていないのだが、昨夜はふと、この10年、20年に社会で起こった革命的なことについて考えを巡らせていた。もはや現代の革命においては武力行使などは必要とせず、それはテクノロジーを用いた形で情報次元で行われているものなのではないかと思った。しかもそれは、私たちの目には見えないところで起こっていて、気がつけば人々の認識と行動が変わっていたという類の革命である。おそらく、一昔前の革命は、物理的な次元における武力の行使を通じて、社会の仕組みという情報次元の革命を実現しようとしたが、現代の革命は、物理次元から情報次元の働きかけを通じてなされるようなものではなく、情報次元で完結し、

革命が実現されたら物理次元の我々の発想や行動がガラリと変わっていたというような類のものなのではないかと思う。

GAFA（Google、Apple、Facebook、Amazon）などのプラットフォーマーの動きを見ていると、まさにテクノロジーを通じた革命を起こそうとしているように思えてくる。それは、最先端テクノロジーを活用することによって、人間と社会を変革していく試みである。

人間は制度に従うという性質だけではなく、制度に抗うという二律背反的な性質を内在的に持っていて、制度から内面を変えていくのは難しいだろうが、テクノロジーであれば制度改革よりもそれが実現しやすいのではないかと思えてくる。もちろん、テクノロジーに対しても抵抗する力が働くこともあるだろうが、テクノロジーの利便性や誘惑に私たちはついついすぐに乗ってしまう。そうした点を利用する形で、実際に今、GAFAたちが目指していることは、テクノロジーを通じた世界規模での革命を実現することなのではないかと思う。成人発達理論を学び、そしてそれを活用した成長支援の実践に長らく携わっていると、人が内面から変わっていくことがどれだけ難しいかがわかる。

確かに私たちの中には変容を遂げていく人もいるのだが、はっきり述べると、それはごくごく少数である。現実を直視すると、大多数の愚民は愚民のままであるというのは、疑いようのない事実ではないかと思う。

民主主義に基づいた社会運営をしていくためには、少なくとも人々が人間としての知性を兼ね備えていることが条件となる。だが実際は、大衆はそうした知性を持ち合わせない。そして、それを発達させていくことは極めて困難であり、実効性に乏しい。GAFAたちもそれを理解しているのか、それでは愚民は愚民のままで、大衆は下等生物のままでも社会が回るようにしていこうという発想で、種々の試みを始めているように映る。小さな実験として自動運転を例に挙げると、あれはチンパンジーのような人間――チンパンジーの方が知性が高いのではないかと思えるような人間がたくさんいることを考えると、少しチンパンジーに失礼かもしれない――を運転席に乗せても事故が起こらないようにという実験のように映る。

それ以外にも、確かカリフォルニア州かどこかにおいて、AIの裁判官が法廷で裁くということがすでに行われていて、それもまた自動運転に似たようなことを目指す試みのように思えてくる。おそらくこ

こからは、欲望にまみれたゴリラのような人間に政治を任せるのではなく、そしてそのような人間が生み出す政策を下等生物に判断させるのではなく、ゴリラや下等生物のような人間がいたとしてもうまく回っていく仕組みをテクノロジーを通じて実現させていくようなことをGAFAたちは考えているのかもしれない。

彼らのようなプラットフォーマーは、水面下でプラットフォームをガラリと変えて、既存のルールとは全く異なるようなルールを社会にもたらす。しかもその変革は、気がつかないうちに実現されていて、私たちはふとした瞬間に新しいプラットフォームの上で、新しいルールに基づいて生きていくことになる。この10年、20年を振り返ってみると、自分を取り巻く社会の中でそのようなことが行われていたように思う。

アメリカでは、現在様々な州が大麻を合法化し始めており、それとヴァーチャル技術の開発の現状と上記の話題を併せて考えてみると、大衆を啓蒙し、彼らの発達を促すのとは逆向きの、つまり彼らをより下等生物化させ──大麻を吸わせ、ヴァーチャルな世界にどっぷり浸かって生きてもらう──、それでいて社会が回っていくような仕組みをテクノロジーを使って実現させていくような発想がGAFAたちにはあるのではないかと思う。フローニンゲン：2020/10/2（金）06:26

6286. 今朝方の夢

時刻は午前6時半を迎えた。自分は左翼（過激な革新派）でも、右翼（排外的な保守派）でもなく、西部邁先生が言う、右翼とは違った意味での保守派の考え方を持っていることに気づいたのはここ最近のことだった。ここからは、上記の3つの政治思想の大まかな括りだけではなく、より詳細に政治思想を探究していこうと思う。先日購入した政治学の専門書は、そうした探究に有益であろうし、昨日日本のアマゾンを経由して購入した、西部先生の8冊の書籍もまた探究を深めてくれるだろう。

日本で現在どのような政治思想が展開されていて、それがどのような政策に結実しているのかにはもちろん関心があるが、今自分が住んでいるオランダ、そしてEU諸国の政治家たちの政治思想と政策により関心を持って理解に励んでいこうと思う。政治は日々の生活と密接に結びついており、私たちの命とも極めて強い結びつきがあるのだから、政治思想と政策の理解は不可欠だろう。

今朝方は印象的な夢を見ていた。夢の中で私は、フローニンゲンの自宅の書斎にいた。外は冷たい雨が降っていて、時刻は午前中ようだった。

突然、外から犬の悲鳴が聞こえてきた。何事かと思って窓際に駆けつけて通りを見ると、1匹の大きな犬が血だらけになっているではないか。そしてその犬の横に小さな犬が1匹、そして黒い孔雀のような鳥がいた。どうやら、犬たちは孔雀の散歩をしていたようであり、悲鳴をあげた犬は孔雀をリードでつないでいた。その大きな犬の体に傘が突き刺さっていて、血が垂れ流されていた。

推測するに、自転車に乗った通行人とぶつかってしまったらしく、その時に傘が犬の体に突き刺さってしまったようだった。それはとても残酷で、痛々しい姿だった。大きな犬は鳴き声をしばらく上げ、その後、なんとか立ち上がり、小さな犬と一緒に、黒い孔雀をリードで引きながら通りを渡ろうとしていた。もしかすると子犬の方は大きな犬の子供なのではないかと思い、子犬は怪我をした大きな犬を心配そうな眼差しで見つめていた。こんな雨であるし、傷口の様子からすると、命はもう長くないだろうと思ったが、どこかで雨宿りをして安静にすることによって、なんとか命が助かって欲しいと祈った。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は見慣れない小さな会議室の中にいた。その会議室にはホワイトボードがあり、そこには何やら数式やグラフなどが書かれていた。会議室の円卓テーブルには、私を含め、小中高時代の親友(HO)と大学時代のサークルの先輩、そして父と見知らぬ外国人がいた。私たちはそこで、株式投資の話をしていた。具体的には、現在のマーケットの様子を分析し、これから何に投資したらいいかの話し合いだった。

数ある投資手法、そして投資対象の中でも、私は結局、長期保有によるインデックス投資を選んだ。それに対して大学時代の先輩は、従業員持株制度を使って自社株の購入に資金を充てるようだった。そこからも引き続き投資に関する話題で盛り上がった。今朝方はそのような夢を見ていた。
フローニンゲン:2020/10/2(金)06:56

6287.『A(1998)』と『A2(2001)』を見て

時刻は午後3時半を迎えた。今日は昼から今の時間にかけて、2つの優れたドキュメンタリーを見た。それは、ドキュメンタリー作家の森達也氏が作った『A(1998)』とその続編の『A2(2001)』である。

この一連のドキュメンタリーは、オウム真理教事件後の信者たちに密着取材を通じて浮かび上がってくる彼らの生活の様子や、彼らに対する市民の反応を映し出している。オウム真理教やオウム信者を外側から映し出す番組は、幼少の頃から今にかけていくつも見てきたが、オウムの内側から映し出す映像はこれまで見たことがなかったように思う。当然ながら、いかなる創作物も作り手の観点や思想が入り込み、それが生み出す盲点もあるが、オウム真理教を内側から映し出しているとても貴重なドキュメンタリーだと思う。

マスコミの報道が極めて偏ったものであることは周知の事実であり、私たちはマスコミが生み出す限定的な情報によって世界観や観点が作られていく。これもまたある種の信念操作であり、カルト教団的な行いのように思えてくる。そもそも、人間は自分が見たいものしか見ない弱き生き物であり、現代人はますますその性向を強めている。SNSなどの情報テクノロジーにより、その傾向が拍車をかけているのは目に見えて明らかだろう。そうした状況に危機感を覚える。

私たちの内的発達や変容を実現させてくれるのは不在を捉え、不在を不在化させることなのだから、偏った情報に観点が固着化してしまうのは、発達上の停滞であり、下手をするとそれが退化をもたらしかねない。まさにこの一連のドキュメンタリーは、マスコミの情報に踊らされてきた私たちには知り得ないオウムの内部事情と状況を知る上で、不在の不在化、すなわちこれまで見えていなかった隠された真実や観点を明るみにしてくれる優れた作品だと思う。

2000年に入ってからもまだオウムの活動は続けられており、同時に彼らの活動拠点の周りでは、撤去を求める運動が続けられていた。その中でも印象に残っているのは、マスメディアでは信者と近隣住民が激しい対立を成しているという報道がありながらも――実際に多くの地ではそうだったが――、いつの間にか信者と近隣住民が親しく日々交流している姿が映し出されていた点である。その中でも特に、ある住民が、「最初は激しく撤退を抗議していましたよ。でもね、もう何が正しいのかわからなくなってきているんです」と述べていたことが印象的である。さらに別の住人が、「今はもう見えない敵と戦っているような感じですかね」と笑いながら答えていたことも印象的だ。

この一連のドキュメンタリー作品には、クリント・イーストウッド監督の善悪を超えた世界を描く発想と似たものが込められているように思えた。今回の森氏のドキュメンタリーが非常に興味深かったので、引き続き、『311（2011）』『FAKE（2016）』『i-新聞記者ドキュメント（2019）』のドキュメンタリー作品

も見ていこうと思う。今日の予定では、『ハンナ·アーレント(2013)』と『彷徨える河(2015)』をみようと思っていたので、それらは明日以降見ようと思う。フローニンゲン:2020/10/2(金)15:45

6288. ホテルの予約を終えて/オピオイド蔓延社会の到来

時刻は午後8時を迎えた。今日もまたとても充実した1日だった。夕方から今にかけて、途中で夕食を挟みながらも、日本での滞在期間のホテルと、オランダに戻ってきてからのアムステルダムのホテルを確保した。色々と吟味しながら、京都、石川、福井、そして関空近くのホテルの予約をし、アムステルダム空港直結のホテルを予約した。結局今回は、アムステルダム空港内のホテルに宿泊し、アムステルダム観光を丸1日した上で、その翌日にのんびりとフローニンゲンに戻ることにした。その方が移動の疲れも軽減されるだろうし、滅多なことではアムステルダムに足を運ばないのでちょうど良いかと思う。

振り返ってみると、最後にアムステルダムに訪れたのは、2018年の5月に開催された国際ジャン·ピアジェ学会に参加した時である。そこでの学会で発表をしたことを最後に、アカデミアの世界から離れたという思い出がある。あの時は学会会場の近くに宿泊し、学会の前日に、ヴァン·ゴッホ美術館を訪れた。今回は、アムステルダム国立美術館とレンブラント美術館(レンブラントの家)を訪れようと思う。

両者を訪れたのは、実に4年前のことになる。4年前に訪れた時の記憶は薄れており、どのような作品があったかを思い出すことが難しい。そうしたこともあり、2つの美術館に足を運ぶのは好ましいように思えた。何よりも、この4年間の自らの歩みを確認するべく、所蔵されている作品から喚起される感覚の変化を確認したいと思う。4年前の自分と今の自分の内的感覚を比較する上でそれは貴重な機会になるだろう。

夕方の日記で書き留めていたように、今日は2時間を越すドキュメンタリーを2本見た。ここ最近はとても良いペースで映像作品を見ることができている。1時間半や2時間の映像作品の中に、これほどまでに多くの学びがあることや、多くの考えさせられることがあることに改めて驚かされる。また、視覚的映像が内側の感覚や感情に訴えかけてくる働きも見過ごすことができない。そうした学習·変容

機会を与えてくれる映像作品をこれまであまり見てこなかったことが逆に不思議になってくるぐらいである。明日からも引き続き、自己と社会に関する理解を深めていく作品を見ていこう。

現代社会は、オピオイド（鎮痛薬）蔓延社会とでも形容できるだろうか。ドラッグの使用やヴァーチャル世界を体験させる技術の発展により、人間として生きていく上で不可欠な現実世界の痛みと向き合わない、あるいは向き合うことを奪われた人間が大量に生産されていく世の中がもうやってきている。

鎮痛薬というのは、確かに手っ取り早く痛みを抑えてくれるが、それはあくまでも対処療法的なのである。人間の発達には葛藤が不可避であり、発達プロセスは死と再生のプロセスと喩えられる。人間の発達はそうした性質を持つにもかかわらず、痛みを得る体験が剥奪されてしまうというのは危険なのではないかと思う。そしてそれは倫理的な問題にもつながるのではないだろうか。私たちが他者を理解する時、痛みに関する共通体験は重要になるであろうし、そうした共通体験が希薄になればなるほど、人同士の理解や交流が困難になってしまわないだろか。私はそうした状態を憂う。

誰もが痛みのない社会というのは聞こえがいいが、そうした無痛社会の到来は、長期的な観点で言えば、人間の精神性をますます貧困なものにし、人類の滅亡を加速させてしまうのではないかと思う。フローニンゲン：2020/10/2（金）20:25

6289. 今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えようとしている。辺りは真っ暗であるが、風の強いことが窺える。寝室と書斎の窓を開けて換気をしているのだが、とても冷たい風が流れ込んでくる。

日本への一時帰国の日まであと少しとなった。日本からオランダに戻ってくる時はもう随分と冷え込んでいることから、マフラーとヒートテックを持参することにした。オランダに戻ってきてからはすぐにフローニンゲンに帰るのではなく、アムステルダムで少しばかり観光したいと思っているので、なお一層のこと防寒対策が必要になる。

書斎の窓を通じて外をぼんやりと眺めながら、今朝方の夢について思い出している。夢の中で私は、見慣れないビルの中にいた。どうやら私は、そこで試験監督のバイトをすることになっているよう

だった。最初私は会議室のような場所にいて、そこで大学時代のゼミの友人に声を掛けた。彼女は大学3年生の時に公認会計士の資格試験に合格し、すでに監査法人でバイトのような形で働いていたのだが、一緒に試験監督のバイトをすることになっていた。

彼女は朝から午後3時まで試験監督をすることになっていたのだが、私は午後3時半からしか空いていなかったので、もう30分試験監督を務めてもらうことを彼女にお願いした。彼女はそれを笑顔で快諾してくれた。実際のところは、私はあまりバイトには乗り気ではなく、午後3時から試験監督ができないこともなかったが、できるだけバイトの時間を減らしたかった。自分には勉強したいことや取り組みたいことが他にたくさんあったのである。

結局私は、午後3時半から午後5時までの1時間半だけ試験監督を務めた。試験監督をしている間はずっと本を読んでいた。試験監督が終わり、1階のカフェに立ち寄ると、彼女もそこにやってきて、何かスイーツを注文していた。それを見て、私も久しぶりにドーナツでも食べようかと思ったが、やはり体に悪そうだったので食べるのをやめた。そこで次の夢の場面に移った。

次の夢の場面では、敬意をを評しているある学者の方と、もう1人見知らぬ男性と一緒に対談を行うことになっていた。対談を行う場所が不思議な場所であり、そこは崖に面した場所だった。崖から落ちると命はなく、非常に危険な場所だったのだが、私は崖を歩くことによって何か大きな気づきを得ているようだった。2人がそこで述べていることの背景にある事柄が全て知覚されるような体験があったのである。

崖を歩き終えると、とても爽快な気持ちになり、ちょうどそのタイミングで対談も終わった。私は2人に元気よく挨拶をした。そこで別れようとしたところ、今先生の名前を呼び間違えてしまったことに気づき、それを謝り、再度挨拶をしてその場を離れることにした。対談場所の近くにはお洒落なカフェがあって、そこでコーヒーを飲みながらくつろいでいると、先ほど対談していた先生が店に入ってきた。私は再び先生の話が聞けることを嬉しく思い、そこでプライベートな話を色々とし始めた。

どうやら先生は、研究の合間に、見晴らしの良い場所に行って、そこから自宅を眺めることを楽しみにしているらしい。自宅の背後にある自然と自宅とのコントラストが素晴らしいとのことだった。そのよ

うに高い場所から景色を眺めることは、良い息抜きになるということを教えてもらい、そこで夢から覚めた。フローニンゲン：2020/10/3（土）06:14

6290. ロイ・バスカーが提唱したいくつかの誤謬について

時刻は午前6時半を迎えようとしている。今日は昼過ぎに1件ほどオンラインミーティングがあり、それを終えたら街の中心部のオーガニックスーパーに買い物に出かける。小麦若葉とヘンプのパウダーが必要であり、あとは一時帰国の日から逆算した形で、玉ねぎを2つ（大であれば1つ）、豆乳を1本購入したい。いつもは椎茸のパックをそこで買っているが、パックで買ってしまうと食べきれない可能性があるので、本日街の中心部の市場が開かれていれば、そこのオーガニック専門店で椎茸をいくつか購入しようと思う。

数日前に、ロイ・バスカーの書籍を読み返していたことを思い出す。バスカーは多岐に渡る認識上の誤謬をしてきており、それらについて印象に残っているものを書き留めておきたい。1つには、“ontic fallacy”という誤謬がある。これは知識の外部化に伴う誤謬であり、知識から主観的なものを完全に抜き去ってしまうことの過ちのことを指す。

いかなる科学的な知といえども、完全に客観的ではあり得ないにもかかわらず、それを認めずして主観的な要素を否定し、それを毒抜きするかのように消し去ろうとするような態度への批判の現れがこの概念にある。知識から主観的なものを排除しようとする態度は、アカデミックな世界でもよく目立ち、実証的か否かを過度に強調する大衆の中にも見られる態度だ。そこでは主観的なものがまるで悪のようにみなされており、それによっておかしな対話や実践がなされているように見える。

とりわけ社会科学において主観性を排して価値中立的になろうとすることは2つの点で不可能であるとバスカーは指摘する。1つには、社会科学が目指すところは、社会生活空間における現実的な介入を意図しているものであるという点である。2つ目は、研究手法の選択や仮説の立案の際に、必ず主観性や価値論が混入するという点である。特に私は最初の点が重要かと思う。結局のところ、主観的なものを排除してしまうと、主張や対話が机上のものとなってしまい、当事者意識というものが極めて薄くなってしまう。自分が取り上げた問題に対して何も心が動かされない状態になって

しまい、それでは単なる機械に成り果てることでもある。熱さも重みも感じられない発言というのは、主観性が取り除かれてしまったものだろう。

そもそも「主張」という漢字が示唆しているように、ある発言をする主体が確立されていること、そしてその主体が持つ固有の主観性を込める形で発言をすることが主張の本質なのではないかと思う。空を切るような発言が世の中で横行する姿を見ていると、改めて主観性の大切さを思う。こうした状況が続けば続くほど、私たちの心や実存はより貧困なものになっていくだろう。なぜなら心や実存というのは、主観性によって成り立っているからである。

その他の誤謬で印象に残っているのは、「認識論的誤謬(epistemic fallacy)」と呼ばれるものだ。これはわかりやすく、beingをknowingに還元してしまうこと、つまり広義には、在ることを認識することに取り違えてしまう誤謬を指す。バスカーが指摘するように、西洋の哲学において、認識論優位の時代が長く続き、存在論が蔑ろにされることが多く、その傾向は今にも引きずられている。私たちがこの世界に対して何を認識するかだけではなく、そもそも私たちとは一体どのような存在であり、世界はどのような場所なのかという存在論的な視座で考えを深めていくことは、今の私の関心の1つであり、そうした関心が映画やドキュメンタリーを見ることに向かわせたと言っても過言ではない。

最後にもう1つバスカーが言及していた誤謬を取り上げると、「思弁的幻想(speculative illusion)」という誤謬がある。これは、哲学と社会生活を分離させてしまう過ちである。これもまたよく見受けられることではないだろうか。思索活動と社会実践の分離をバスカーは強く否定しており、その点に大きな共感の念を抱く。今道友信先生の実践美学や、シュタイナーの実践霊性学とでも形容できるような霊性思想に関心を持ち、それを自分なりの実践の形で社会課題に適用しようとしているのは、思弁的幻想に陥らないようにする自分なりの試みなのかもしれない。フローニンゲン:2020/10/3(土)06:41

6291. 実在世界に自己の拠り所を見出すこと

時刻は午前11時に近づこうとしている。曇り空の下、土曜日がゆっくりと進行している。

早朝にふと、2年前の一時帰国の際に、行きの機内でほとんど睡眠を取らなかったことにより、日本に到着して数日後に体調を崩し、胃腸の働きが悪くなったことを思い出した。より具体的には、胃腸

の機能不全により、食欲が減退し、朝食のレストランで取った肉を見て、吐きそうになってしまったことを思い出したのである。この記憶が突然呼び起こされたことは興味深い。あの時の私は、肉に対してそのような反応を見せたが、野菜や果物に対してはそのような身体反応が起こらなかった。それを見て、やはり肉を拒絶する根源的に何かが自分の中にあることを知った。

弱っている時にこそ、身体的･精神的な自分の素が現れてくるものではないだろうか。自分の素の中に、肉を取り入れることを拒絶する何かがあり、それがあの時偶然身を襲った胃腸の機能不全によって気づかされたのだと思う。

ロイ･バスカーが述べる“the real”と“the actual”の違いについて考える。バスカーの批判的実在論にといては、3つの階層構造で存在的世界を捉えている。一番下の階層にあるのは、“the empirical”と呼ばれる階層であり、それは私たちが日々間接的あるいは直接的に直面する種々の経験が生じる階層（経験世界）である。その上位に位置するのが「現実世界（the actual）」と呼べるような、ある個人が経験する体験とは独立した形でこの世界に実際に起こっている種々の現象や出来事（その個人が観察できるか否かにかかわらずこの世界に発生している現象や出来事）を司る階層である。

そして、その上位に「実在世界（the real）」を規定し、個人や社会の経験や出来事を生み出すメカニズムを司る階層を想定している。端的には、最後の「実在世界」は、私たちの経験や概念などとは独立に存在しており、その全体や細部を知ることは不可能であり、これは社会学者の宮台真司先生が提唱している「社会の外側にある世界」という考え方とほぼ同じなのではないかと思う。メカニズムを司る実在世界は、その複雑性と予想不可能性から全てを規定することは不可能である。私たちの日々の行動や社会というのは、この規定不可能な実在世界の中にある。

当然ながら、自然科学･社会科学のアプローチや叡智を用いてメカニズムを1つ1つ解明していくことは重要な側面もあるが、1つのメカニズムの解明はまた未知なるメカニズムを生むという「不在の弁証法的プロセス」がそこにあるがゆえに、それは終わりのない試みである。

ここ最近重要だと思うのは、そうした規定不可能な世界の中に生み出されるメカニズムに着目するだけではなく、それよりむしろ、そうしたメカニズムを生み出している超越的な世界に眼差しを向ける

ことである。端的には、超越的な世界を直視しながら、そうした世界から産み落とされるメカニズムを見ていくという感覚だろうか。

超越的な世界の内部に形作られる社会の中でいかに自己のアイデンティティを確立しようと思っても、やりがいや生きがいを見つけようと思っても、往々にしてそれがうまくいかないのは、概念世界としての社会が絶えず予測不可能な形で絶えず変化しているからだろう。端的には、揺れ動く社会の中で自己を規定しようとするからうまくいかないのであり、それが絵も言わぬ不安や焦燥感などを生み出しているのではないかと思う。そうであれば、それに対する打ち手として、絶えず変化を生み出している社会を超えたところに存在している実在世界の中に自己のアイデンティティを確立していくこと、そしてその世界を通じて自己のやりがいや生きがいを見いだしていくことが挙げられるのではないだろうか。

実在世界は変化を超越しており、絶えずただそこに全体として在る世界である。これまで社会の中に自己の拠り所を見出そうとして私たちは失敗してきたのだから──それは現在進行形で行われている営みである──、そうした実在世界の中に自己の拠り所を見いだしていくことが私たちに求められていることのように思える。フローニンゲン：2020/10/3（土）11:22

6292.『彷徨える河（2015）』を見て

時刻は午後4時半を迎えた。先ほど街の中心部での買い物を終えて自宅に戻ってきた。今日はこれから雨が降るようなので、雨が降る前に買い物から帰ってこれたことは幸いである。本日の買い物を持ってして、一時帰国前の買い物は終わりである。

先ほど街の中心部に行ってみて気がついたが、フローニンゲンの外からやって来たと思われる人たちの中でマスクをしている人たちが多かった。これまでオランダでは、公共交通機関の中だけでマスクの着用が義務付けられており、外でマスクをしている人はほとんどいなかった。ところが先週ぐらいからとりわけオランダ南部（アムステルダム、ハーグ、ロッテルダム）でのコロナの感染者が一気に増え、その辺りの地域から来たと推測される人たちは街でもマスクを着けて歩いていた。オランダではこれからより一層寒くなり、コロナの第2波が心配される。

つい先ほど、昼に途中まで見ていた『彷徨える河(2015)』を見終えた。この作品は、コロンビア人のシーロ·ゲーラ監督によって作られたものであり、20世紀前半にアマゾンを訪れた2人の白人探検家の実際の日記を基に作られた作品だ。話の内容は、数十年にわたって他者との接触を拒んできた部族最後の生き残りである呪術者カラマカテが、聖なる樹木ヤクルナの調査に来たドイツ人民俗学者と共にカヌーを漕いでアマゾン奥地へと入っていく中で、失われた記憶を取り戻していくというものだ。

物語の中では、「カーピ」と呼ばれる植物のエキスを飲むシーンがあり、それは強烈な幻覚作用があり、アマゾンのシャーマンの世界ではまたの名を「アヤワスカ」と呼んでいるものである。物語を見ていく過程の中で、ここでもまた文明人の時間の流れとは全く異なる流れがジャングルの世界と先住民族の世界の中で流れていることが感じられる。先住民族には文明人とは異なる認識世界があり、それは同時に存在論的にも異なる存在世界があるのだと思う。認識の階層構造と存在の階層構造の相違と、認識世界の階層の違いが存在に異なる影響を与えていることも窺い知ることができる。

その他に書き留めておくべきことは、ジョン·エフ·ケネディ大学に留学していた頃に体験したシャーマニズムの儀式の記憶が自ずから思い起こされるような体験があったことだろう。シャーマンが見ている世界と私が見ている世界は異なり、彼らが見ている世界に参入することによって初めて開示された認識世界のことを思い出す。話の中で、夢に治療を求め、夢の声を聞くことの大切さについて言及されていたのは印象的である。夢は治癒を促す素材に溢れていて、夢の声は人生の方向を導くような力がある。夢が持つそうした力を汲み取る実践はこれからも続けていきたい。

最後に、ストーリーの中で出て来た「チュジャチャキ」という言葉が印象に残っている。これは、実態はあるが中身のないもののことを指す。例えば、姿形は人間であるが、人間としての中身のない人間のことや、言葉としての実態はあるが、中身のない言葉などが具体例として挙げられる。

先住民族が述べたチュジャチャキという言葉に象徴されるような人間や言葉、そして仕組みで溢れているのが文明人たちの社会なのではないかという批判的なメッセージも汲み取ることができる作品であった。フローニンゲン:2020/10/3(土)16:48

6293. “Unacknowledged: An Expose of the World’s Greatest Secret (2017)”を見終えて

時刻は午後7時を迎えた。つい今し方夕食を摂り終えた。先ほど、数日前から視聴を始めていた“Unacknowledged: An Expose of the World’s Greatest Secret (2017)”を見終えた。数日前に言及したように、これは地球外生命体に関する過去現在のアメリカの調査の実情を描いていて、とても興味深い内容であった。

残りの1時間を見る中で印象に残っているのは、UFOをモチーフにした過去の絵画作品が取り上げられ、それは今から2年前の夏にロンドンナショナルギャラリーに訪れた際に私を釘付けにしたキリスト教絵画だったことだ。それは、カルロ･クリヴェッリが描いた『聖エミディウスを伴う受胎告知』という作品である。

あの日私は、ロンドンナショナルギャラリーの宗教画のエリアを歩きながら様々な作品をぼんやり眺めていた。キリスト教絵画が私の内側に響き始めたのは、昨年末のマルタ共和国に訪れたときであり、ロンドンを訪れたその時の私には、キリスト教絵画はほとんど内側に響いてこなかった。しかしながら、クリヴェッリのその作品だけは私をひどく捕らえていた。その時の私は、マリアの頭上に輝くハトが描かれていることに注目をしていて、ハトを照らす光の先に何気なく描かれている円盤状の物体には大して注意がいっていなかった。

この絵画が描かれたのは1486年のことであり、実際にクリヴェッリがUFOを見たのかどうかは定かではなく、この作品をもってして、人類は数百年も前からUFOの存在を認識していたと述べることはできないであろうが、いずれにせよ、その時代にUFOを示すモチーフが描かれていることが興味深い。また、2年前の夏のあの日に、ロンドンナショナルギャラリーで私がこの作品にやたらと惹きつけられていたことも偶然では済ませられないようなものがあるように思う。

数日前の日記でも言及したように、アメリカは膨大な軍事予算以上にUFOや地球外生命たいの調査と研究を進めている。作品の中で、そうした国家規模のプロジェクトに過去関与していたある人物の話が大変興味深く――こうした人物がもう公に情報を開示できるような時代に入って来ているということもまた興味深く、一昔前であれば、彼は間違いなく国家の手によって暗殺されていたであろうと本人も述べていた。おそらくAmazonプライムのオリジナル作品としてこのドキュメンタリーを公開した

ことは、今後地球外生命体の存在を認める報道をしたときに、アメリカ国民全体、そして地球市民全体が驚かないようにする下準備のようにも思える──、彼曰く「この世界の本当の脅威は、ISISでも、イラクでも、ロシアでも中国でもない。脅威なのは、このプロジェクトに携わるソシオパス的な人間であり、彼らが地球を代表して地球外生命体とコミュニケーションを図ることである」と述べていた。

少し補足すると、これはアメリカの視点ではあるが、この世界の本当の脅威は特定の国でも組織でもなく、UFOや地球外生命体の調査･研究の蓄積によって獲得された、地球を滅ぼすようなテクノロジーを乱用してしまうことであったり、どれほどの力を持つのかわからない地球外生命体を怒らせてしまうようなソシオパス的なコミュニケーションをすることである、という意味のことを述べていたのである。

番組の中でも暴露されていたが、アメリカが軍事予算を使って戦争を仕掛けている国々は、単なる仮想敵国であり、戦争をすることによって経済を潤し、経済を回すためであり、実はその背後には、アメリカが本当の脅威だと思っている地球外の未知なる存在の調査から国民の目を背けるためであるという説明もまた興味深かった。

近年はNASAなどでも地球外生命体に関する調査報告のようなものがすでに出ているとのことであり、早速調べてみると、確かにいくつかレポートが公開されていた。こうしたレポートはすでに誰でもアクセスできるようになっているのだが、一般人はこうした科学的なレポートを読むことはほとんどないだろう。だが今回のドキュメンタリー番組のように、ここから少しずつ様々な形で地球外生命体やUFOに関する情報が公開されていき、近い将来にはそうした存在が当たり前のように認識されるようになるのではないかと予感する。フローニンゲン：2020/10/3（土）19:42

6294. 今朝方の印象的な夢

時刻は午前7時を迎えようとしている。昨夜は、一瞬一生の会の補助音声教材を作っていて、先週から突如として目覚めた映画評論の活動の一環として、直近で見たいくつかの印象に残る映画やドキュメンタリーについて紹介をしていた。2つの音声ファイルしか作っていないのが、1つ1つが長くなり、合計で90分を超えるものになった。映画評論と言っても現在は単なる感想程度のものでしかないが、この取り組みは続けていこうと思う。映画やドキュメンタリーを見る都度、メモ程度でいいの

で書き留めておき、印象に残る作品については音声ファイルとして言語化しておこうと思う。ひょっとしたら今日もまた何らかの作品の音声ファイルを作っていくかもしれない。

今朝方はいくつか印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、気がつくと、スカイツリーよりも高い塔の天辺にいた。どうやら私は、その塔をボルダリングのように登り切ったらしいのだ。自分の体を見ると、安全ロープは一切なく、よくそのような形で登れたなと自分で感心をした。

天辺からの眺めは良いというよりも、あまりの高さに恐ろしいぐらいであった。地上が全く見えないぐらいの高さであり、ここからどのように降りていけばいいのか途方に暮れた。すると、次に登ってこようとしているのは高校時代のサッカー部の友人だった。地上にいる彼の姿は見えないので、彼とテレパシーをするような形でコミュニケーションをし始めた。

私の右手にはブドウジュースがあり、それを全部飲み切ることができそうにないと思ったので、その友人にあげようかと思った。彼に確認しようと思ったのは、ジュースを天辺のどこかに置いておけばいいのか、それとも下に持って降りた方がいいのかという点である。

すると、彼は同じジュースを持っているとのことであり、ジュースはいらないと述べた。それを聞いて少し残念に思い、もう喉は乾いていなかったが、ジュースを全て飲み干すことにした。ジュースの入っていたプラスチックのカップをどうすればいいのかを考えたところ、それは天辺に置いておくことにした。命綱がなく、それでいてカップを持ちながら下に降りるのは賢明ではないと思ったのである。

さてこれからどうやって下に降りていくかを考え始めたところ、私の前に登った人はどのように降りたのだろうかと疑問に思った。飛び降りたら間違いなく死んでしまう高さであるから、なんとか工夫して降りなければならならないと思った。降り方を考えていると、登る前に立ち寄ったトイレの場面が思い起こされた。トイレの壁にポスターのようなものが貼られていて、そこに図解入りで降り方が書いてあったように思い、それを必死に思い出すことにした。しかし詳細を思い出すことができず、トイレで用を足しているところしか思い出すことができなかったので、腹を括って、ゆっくりと下に降りていくことを決心した。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は日本旅館にいた。そこには小中高時代の女性友達と100歳を超える女性の芸術家の方がいた。3人で和気藹々と話をしていると、突然その芸術家の方が畳の上に寝転がり、転がり始めた。私はその方が頭を机の脚にぶつけないように近くで見守っていて、机の脚の部分を手で守っていた。すると突然、横にいた友人が私のことを「左翼！」と叫んで罵倒し始めた。一体自分のどんな行動が左翼に映ったのか分からず、キョトンとしてしまった。

彼女の罵倒は止まず、ちょうど彼女の知り合いの男性が部屋の外に現れたので、その方に部屋に上がってもらい、自分のどのような行動が左翼だったのかを確かめてもらうことにした。すると、その方もキョトンとしていて、結局自分のどのような行動が左翼的に映ったのか不明だったが、友人は相変わらず気が動転しているようだった。

最後の夢の場面では、私は列車の中にいた。雰囲気からすると、どうやら日本のようだった。私の出立ちは少し変わっていて、立派なオーダースーツを着ていながらも、中はワイシャツではなく半袖のTシャツを着ていた。少し時計の針を巻き戻すと、私は小中高時代のある女性友達と列車に乗ろうとしていたのだが、切符をまだ買っていないことに気づき、彼女に先に列車に乗ってもらうことにした。最悪自分は次の列車で行くつもりでいた。

プラットフォーム上に切符販売機があり、そこで120円ほどを入れて切符を買おうとしたところ、彼女が乗った列車は出発しそうになっていた。彼女が乗った車両は満員状態であり、そうであれば次の列車に乗った方が賢明かと思われたが、隣の車両はがら空きであった。切符を無事に購入した私は、急いで隣の車両に乗った。本当にその車両には人がほとんどおらず、不思議に思えた。すると、車両の棚に不気味なものが置かれていることに気づいた。そこには男性用のブーツが何足か、そして靴下などが置かれていたのである。

私は錯覚として、切断された足がそこに置かれているように思った。その棚の付近にはより一層人がいなかった。私は棚の上に置かれているブーツを見て、それらの持ち主は大学生ぐらいの若者であり、新宿や渋谷でハメを外してマリファナでも吸っていたのではないかと推測した。そのような推測をしたところ、見知らぬ中年の男性が、「これを嗅いでみてください」と私に述べた。

その男性の手元を見ると、何かの吸い殻らしきものがあった。その匂いを嗅ぐと、マリファナのあの甘ったるい嫌な匂いがした。すると辺りが突然真っ暗になり、列車が突然止まった。どうやら、この列車はテロリストに襲撃されたようだった。このテロは単独犯の行動らしく、相手は1人だった。

私はそのテロリストと戦うことを決め、彼がこの車両に移ってきたときに勝負を決めようと思った。車両にいる乗客の数は少なかったが、彼らの気は動転しているようであり、正常な判断ができるかどうか心配だった。実際に10人ぐらいの彼らが一斉に車両から外に出てしまい、テロリストは彼らの存在に気づき、急いでこちらにやってきた。テロリストの手にはロケットランチャーがあり、その武器の攻撃力は凄まじいものがあるので、これは慎重に戦わないといけないと思った。

すると、気がつけば私たちはどこかの駅にいて、駅前に小中高時代の友人(YU)がそのテロリストに人質になっていることに気づいた。私は友人を救出しようと思い、テロリストのところに向かったところ、テロリストはもうロケットランチャーを手に持っておらず、その代わりに日本刀を持っていた。ふと自分の手元を見ると、私も日本刀を持っていて、これであれば平等だと思った。そこから私は目にも止まらない速さでテロリストの首を斬りつけ、半分首を落とすことに成功し、友人を無事に救出した、今朝方はそのような夢を見ていた。フローニンゲン:2020/10/4(日)07:23

6295. 超越世界に基づいて/沈みゆく船/必然性と学びと発達

時刻は午前7時半を迎えた。空は少しずつ明るくなってきているが、今日も曇りがちの1日のようだ。気温はもうすこぶる寒く、昨日はヒーターのスイッチを入れるかどうかを迷ってしまったほどだった。今日もまた昨日と同じぐらい寒い。

まだ10月に入ったばかりであり、これからが冬本番であるから、できるだけヒーターをつけずに粘り、身体を寒さに慣らしていこうと思う。おそらく日本からオランダに戻ってきた頃はもうヒーターをつけずにはいられない頃かと思う。11月から5月末までの長い冬がこれから始まる。

超越的なものへの眼差しを絶えず持っておくこと。超越的な世界に自己の拠り所を持っておくこと。そして、そのような世界に立脚する形で創作活動を行なっていくこと。そのようなことを昨日考えていた。変動の激しい現実世界に身を置きながらも、そうした現実世界に拠り所を置くのではなく、ある意味不動の超越世界に自己の拠り所を見出すことが、自己に平穏な心をもたらす。荒れ果てた

波に自己を置くのではなく、仮にそこに自己が置かれているように見えたとしても、自己自身は絶えず波の立たぬ深海を見ておくこと。それが大事だ。

人は自分に降りかかる個人的体験や、現実世界(the actual)で起きている種々の出来事に翻弄されがちであるが、そうした体験や出来事を生み出している外側の実在世界(the real)に眼差しを置いておくことが重要になる。それができれば、自身に降りかかる種々の体験や、現実世界の種々の出来事に右往左往しなくなるだろう。全ての体験や出来事を、実在世界からの投げかけであると捉えられるかどうか、そうした認識でこの現実世界を生きることができるかどうかが覚者の要件だろう。

幸福度の高い国では、人間がいて、人間条件を大切にする精神と実践がある。果たして日本はどうだろうか。人間のような人間ではない人間がたくさんいて、知性や感受性といった人間条件を欠くような人間で溢れてはしないだろうか。今回の一時帰国ではそうした点について確認をしてみようと思う。

この9年間、年単位でのデータポイントを取得して、年という大きな括りでの時系列データが自分の中にあり、そのデータが示す日本の状態はあまり良くない。人も社会も劣化の方向に向かっていることは確かであり、その速度は緩やかなのだが、緩やかであることが逆に仇となっている。端的には茹でガエル的な形で、あるいはゆっくりと沈みゆく船のような形でそうした傾向が進行しているため、人々は自らの置かれている状況に気づくことができないのだと思われる。

切実な必然性に駆動されて日々の探究と実践が進んでいく。そうした切実な必然性が学びや自己を深めていくには不可欠だと改めて思う。必然性があれば、人は不思議なほどに深く学び、大きく変わっていく。今様々な必然性に突き動かされる形で毎日を過ごしている自分がいる。フローニンゲン:2020/10/4(日)07:42

6296.『アンネ·フランク:生存者が語る「日記」のその後』『さまよえるWHO:米中対立激化の裏側』『FAKE』を見て

時刻は午後4時を迎えた。今日はこれまでのところ、合計で4つのドキュメンタリーを見た。まず最初に見たのは、『アンネ·フランク　ー生存者が語る「日記」のその後ー(2019)』の全編と後編である。

このドキュメンタリーは、10代の若者カテリーナを主人公にし、アンネ･フランクが命を落としたドイツの強制収容所ベルゲン･ベルゼンから旅を開始し、旅の最中に感じたことをSNSのメッセージとして発信しながら、アムステルダムにある「アンネ･フランクの家」を目指すという作品だ。作品の中では、ホロコーストから奇跡的に生還した生存者たちが登場し、彼らのインタビューも取り上げられている。観点が反戦に偏っており、真実の相対性や多様な真実にまで踏み込んでいない点は残念であったが、史実として抜け漏れている知識を与えてくれるような作品だった。

次に見たのは、『さまよえるWHO―米中対立激化の裏側―(2020)』という作品である。これは、アメリカが脱退を表明したWHO(世界保健機関)の新型コロナウイルスへの初動の遅さの背景を取り上げ、WHOの設立からこれまでの取り組みを概観し、WHOが米中対立の戦場になっている姿を映し出している作品である。WHOの予算は大都市の医療を賄うほどの大きさしかなく、予算はビル&メリンダ･ゲイツ財団などからの巨額の寄付に依存している。そうした依存の問題を描き出したり、現在では様々な国際機関のトップを中国人が務めるようになってきており、国際政治の勢力図の変化を教えてくれるような作品だった。

そして先ほど見終えたのは、先日見た『A』や『A2』を手掛けた森達也監督の『FAKE』という作品である。これは、2014年に作曲のゴーストライター騒動で世間を賑わせた佐村河内守(さむらごうちまもる)氏を追ったドキュメンタリーである。端的には、『A』や『A2』に引き続き、このドキュメンタリーもまた非常に貴重な作品だと思った。「ポスト真実(客観的な事実や真実が重視されない時代)」の時代において、大衆はマスメディアから流される断片的かつ偏った情報を真実として受け取ってしまい、より包括的な真実を求めることができなくなってしまっている中で、こうしたドキュメンタリーは本当に価値あるものかと思う。

ある一定のメディアリテラリーや知性があれば、絶対的な真実はないという前提を持って多様な観点と情報を参照しながら真実に迫っていく姿勢があるはずだが、大衆にはそうしたリテラシーも知性もないことを考えると、今後ますます感情的な、あるいは動物反射的な形でメディアの報道に反応してしまう傾向が強まってしまうのではないかと危惧するしかも、ポスト真実時代のメディアにおいては、平気で嘘の情報が流されることもざらにあり、そうした誤った情報に過剰反応する大衆によって、別種の歪な真実が構築されてしまう極めて厄介な時代の中を私たちは生きているのではないかと思わされる。

ポスト真実の現代社会の有り様についてさらに探究を深めていくために、取り急ぎルートリッジ出版の“Post-Truth, Fake News and Democracy: Mapping the Politics of Falsehood (2019)”、オックスフォード大学出版の“Network Propaganda: Manipulation, Disinformation, and Radicalization in American Politics (2018)”、MIT出版の“Post-Truth (2018)“を購入予定の文献リストに加えた。フローニンゲン:2020/10/4(日)16:32

6297. ″Regular Heroes (2020)“の第1話を見て/落ちていくところまで落ちること

時刻は午後7時を迎えた。今日は午前中に小雨が降る時間帯もあったが、今は嘘のように空が晴れ渡っており、夕日で輝く空を眺めることができている。ここのところは天気があまり良くなかったので、久しぶりにこうした澄み渡る夕暮れ空を見ることができているように思う。いよいよ来週の水曜日に日本に一時帰国する。日本に滞在中に天気に恵まれることをそっと祈る。

今日は合計で4つほどドキュメンタリー作品を見た。先ほどは″Regular Heroes (2020)“という8話シリーズの第1話を見た。この作品は、コロナ下において誰の目にもつかないところで様々な領域で活動している普通の人々にスポットライトを当てて取り上げている。第1話では、ニューヨークの医師、ロサンゼルスでホームレスの人々に食料を提供する女性の活動家、ニューオーリンズでコミュニティーに食事を提供する雑貨屋の店主などが取り上げられていた。こうした状況下において、利他的に活動する人々の姿には本当に心を打つものがある。

明日は第2話の続きから視聴したい。ここでは学校閉鎖の中で活動する男性高校教師や、動物園で動物の世話を懸命に続ける女性の飼育員、さらにはニューヨークのレストランを1人で切り盛りするシェフが取り上げられている。明日はこのドキュメンタリーだけではなく、AI関係の映画を見ようと思う。いくつか興味深い作品を見つけたので、今後はAIというテーマ設定をして映画作品を見ていこうかと思う。

専門書を読む時も、ある分野に焦点を当てて一気に複数の専門書を読み進めていくことを行っていて、それがその分野に関する理解の幅と深さをもたらしてくれているように思う。それと同じことを映画やドキュメンタリーの鑑賞においても意識していこう。そこでは明日からのAIのようなテーマ設

定もあれば、政治というテーマ設定もあるだろう。さらに細分化すれば、時間というテーマであったり、命というようなテーマ設定もできるだろう。ここからはそうしたテーマ設定を意識していく。

今目の前に広がるエメラルド色に輝く夕焼け空があまりにも美しいので、もう1度顔を上げて見てしまった。人間界とは異なる時間感覚、そして人間界とは独立した形で進行してくものを自然界の中に感じる。

今日は夕方に、子々孫々の人類の繁栄を考えてみたときに、人間と社会は1度落ちるところまで落ちて膿みを出し切った方がいいのかもしれないということをふと思った。いかようにして人間は堕落していき、そこで人間はどのように振る舞い、社会はどのように運営されていたのかの失敗事例を後世に伝えていくことが必然的な流れになっているような状況に人類が置かれているように思えてくる。

人間と社会が堕落していく姿を克明に記録しておくことは、自分が果たす小さな役割の1つかもしれない。まずは日本に着目してみよう。日本が健全性を取り戻し、様々な意味で豊かな国になっていくことを願って、現在進行中の、そしてこれから継続していくであろう衰退の様子を克明に記録していく。なんとなくでは変わらないのだ。我が国はこれまで311を含め、様々な危機的状況に置かれながらも結局変わらなかった。

まだ落ちるところまで落ちていないのだ。変革の必然性を感じるような、内的必然性を感じずにはいられない状況にまで1度堕していく必要がある。そこでは残念ながら痛みや犠牲が伴ってしまうだろうが、そうした変革への必然性を全員が感じるぐらいの危機的状況まで堕していくしか方法がないところまで来ている。発達の根幹原理である死と再生のプロセスを考えてみたときに、我が国は1度死を体験する必要があるのではないかと思ってしまう。フローニンゲン：2020/10/4（日）19:31

6298. 今朝方の夢

時刻は午前7時を迎えようとしている。昨日は、就寝前に少しばかり映画に関する調べ物をしてしまったからなのか、すぐに寝付くことができず、今朝はゆったりとした起床だった。就寝前にどのよう

に過ごすかが寝付きに影響を与えることを改めて実感する。幸いにも、睡眠の質には影響をそれほど与えず、快眠だったように思う。快眠中に見た夢を、今少しばかり思い出している。

夢の中で私は、高校1年生の時に同じクラスだった2人の友人と話をしていた。実は2人はそれほど仲が良くなく、私が間に入る形で話をしており、私としては彼らの関係性が良くなることを願っていた。

友人のうちの1人が、先ほど朝9時にスーパーに行ったところ、客が誰もおらず、無音だったことに驚いたと述べた。いくら開店直後の時間とはいえ、その他にも客はいるだろうと思ったが、時には全く客がいないこともあるのかもしれないと思った。もう1人の友人は、無音のスーパーに関心を持ったらしく、では自分も今度その時間にスーパーに行ってみようと述べた。そのような話をした後に解散することになった。

解散後、片方の友人と自転車に乗って自宅に戻ろうとしていると、私の横にもう1人自転車を漕いでいる人がいた。見ると、現在協働中の方だった。その方は私よりも若く、まだ30歳になるかならないかぐらいの年齢である。その方の存在に気づくと、高校時代の友人はもうどこかに消えていた。そこからはその方と一緒に自転車を漕いで自宅に向かって行った。そこでその方がふと、「この辺りに日銀があるはずなのですが…」と述べた。それに対して私は、「日銀ですか？確かに日銀ならあの辺りにありますよ」と述べた。

するとその方は、「日銀のある通りで曲がりましょう」と述べた。確かにその通りで曲がっても自宅に着けるが、さらにもう一本先の道で曲がった方が早く自宅に着けることを知っていたため、それを明示しない形で、一本先の道にその方を誘導して行った。そのような形で自転車を漕いでいると自宅に到着した。自宅は4階建てのアパートであり、玄関のドアを開けると、ちょうど1階のオランダ人の住人が洗濯をしようとしているところだった。

各階に洗濯機があり、彼は1階の洗濯機を使い、洗濯が終わったら、2階の共有の乾燥機を使う予定のようだった。彼は私に顔を見せることなく、洗濯機の方に向かってそそくさと歩いていた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は日本旅館にいた。厳密には、旅館の大きな座敷部屋にいた。その座敷部屋には畳の上に、木製の背の低いテーブルが所狭しと置かれていて、どうやらそこで勉強会が行われているようだった。私の横には大学時代のゼミの友人が何人かいた。そのうちの1人(YN)が長期の休みの期間はずっと金融を勉強していたらしく、相当に専門書を読み込んでいたようだった。その専門書には計算問題のエクササイズも充実しており、いくつかよく分からない問題について、彼は私や別の友人(TA)に質問をしてきた。

それらの質問のうち、数式を扱うものは会計士の友人に任せ、自分は理論的な部分の説明をすることにした。しばらく金融に関する勉強を全員でしていると、質問をしてきた友人のテーブルの小さな本棚にはその他にもたくさんの本があった。それらの本のタイトルを見ると、選定がなかなか良いと思った。彼もまた読書に目覚めたのかと思って私は嬉しくなり、何冊か彼の本を手に取ってパラパラと中身を眺めた。

すると1冊ほど、変わった本があることに気づいた。それは和書であり、本全体に典雅な和紙のブックカバーがなされていて、なんと1ページ1ページに防水用のカバーがかけられていたのである。不思議な本だなと思って中身を眺めていたところ、私の右横にいた別の友人(TM)も同じ作りの和書を持っていた。それに気づいた時、私の目の前に突然、イギリス人の女性教師が現れ、誰か英語が話せる人はいないかと言われたので、自分が話せる旨を伝えた。するとそこからは、その女性教師と一緒に部屋を回っていき、様々な学生に英語で話しかけて行った。今朝方はそのような夢を見ていた。フローニンゲン:2020/10/5(月)07:13

6299. 多様な危機とメタ的な危機/「反成長」/「実際的なイデオロジー」

時刻は午前7時半を迎えようとしている。この時間帯になってようやく辺りが明るくなり始めた。完全に辺りが明るくなるまであと30分か1時間は必要だろうか。ちょうど今月末にサマータイムが終わり、オランダに戻ってきてからはサマータイム終了後の時間で動いていく必要がある。サマータイムの終わりをもって、本格的な冬がやって来るだろう。

今日もまた創作活動と映画の鑑賞に十分な時間を充てたいと思う。今日の映画鑑賞においては、AIを取り上げた作品を2つほど見てみようかと思う。

グローバル規模で起こる多様な危機（polycrisis）とメタ的な危機（meta-crisis）の時代を生きている私たちにとって、それらの危機がどのような性質を持ったものなのかを把握することが第一歩になるだろう。映画やドキュメンタリーなどの映像作品は、そうした危機の性質を教えてくれる上で、そしてそれらの危機に対してどのように行動していけばいいのかを考えさせてくれる上でとても良い題材になる。

量的な成長と質的な発達の区別をつけることにより、反消費主義に基づく反成長（degrowth）を推し進めていくことによっても発達は実現可能だということが見えてくる。同様の指摘は、ロイ･バスカーもしていたことを思い出す。消費主義に立脚する形で成長をいつまでも追い求めることは、多様な危機やメタ的な危機の根幹にあるように思われ、それをさらに推し進めていくことは、大きなメタ的な危機の引き金になってしまう可能性が見えてきている。

そのようなことを考えながら、マルクスの指摘を思い出す。マルクスが述べるように、種々の社会実践や社会的な各種の機関というのは、私たちが生活している社会そのものを映し出している。それらは人間の産物なのであるという認識を改めて持ち、この社会で何が行われていて、どのような機関が活動をしているのかを冷静かつ批判的に見つめ直す必要があるように思える。社会の中での人間の振る舞いや、いかなる機関が社会の中でどのように振る舞っているのかについては、やはり映画やドキュメンタリーが多くのことを教えてくれる。

ロイ･バスカーが指摘するように、建設的な批判そのものも1つの活動であり、実践なのだから、映像作品を通じて得られた観点をもとに、人間存在や社会の有り様に思慮深く建設的な批判を加える実践の必要性を強く感じる。バスカーは、生きた幻想の網の目のことを、「実際的なイデオロジー（practical ideology）」と呼んでいる。それを「実際的」と呼んでいるのは、そうした諸々の幻想の網の目が実社会で何かしらの機能を果たしているからだと思われる。

私たちは誰しもそうした実際的なイデオロギーに取り囲まれる形で生きている。地政学的、歴史学的、政治経済学的な考察をしなければ、そうした幻想の網の目の所在を突き止めることも、それらの構造的特性を突き止めることもできないだろう。一方で、バスカーの興味深い指摘は、幻想のあるところに光ありと見ている点だ。もっと言えば、不在の不在化という発想を用いれば、幻想のないところに光なしという考え方になるだろう。

© YOHEI KATO 2020

解放が実現されるためには抑圧が存在していることが前提にあり、そもそも抑圧がなければ解放はないのである。そこから現代社会において種々の抑圧があるということは、種々の解放の可能性の目が僅かばかりでも存在しているという見方もできるだろうが、その見方の程度を誤れば、それは単なる楽観主義的な発想に留まるだろう。上述の人間存在や社会の有り様に対して建設的な批判を加えていくことは、不在の不在化の実践に他ならず、それが幻想の網の目に何かしらの光を照らし、解放の実現に向けた活動になるだろう。フローニンゲン：2020/10/5（月）07:37

6300.『her 世界でひとつの彼女（2013）』と『オートマタ（2013）』を見て

時刻は午後4時に近づいている。つい先ほど、本日2つ目の映画作品を見終えた。今日は、AIを主題にした映画を見ることにし、『her 世界でひとつの彼女（2013）』（原題：Her）と『オートマタ（2013）』（原題：Automata）を見た。もちろん、AIを含め、その他の来たる社会現象については、様々な学術書を読むことによって色々なことを想像することができるが、近未来の人間社会について映像を通して体感的にそれを見通させてくれる力が映画作品にはある。

最近では、AIの研究者たちがSF映画の監督と交流し、研究上の意見を求めることも多いということを聞くが、それもうなづけるぐらいにSF映画は科学研究や社会の方向性を示すものになっているものが多い。引き続き、映画を題材にして、心理学、社会学、政治学、宗教学、哲学などの様々な学問分野を横断する形で、人間と人間社会について考察を深めていこう。

2つの映画について簡単に言及しておきたい。前者の映画は、アメリカ人の才スパイク･ジョーンズ監督が制作したものであり、近未来のロサンゼルスを舞台にした、携帯電話の音声アシスタントAIのサマンサと中年男性の主人公であるセオドアの間に芽生えた愛をテーマにした物語である。

作品の冒頭を見たときに、そういえばこの作品は、私がまだアメリカ西海岸に留学していた時に訪れた映画館で予告編だけ見たものだということを思い出した。いや、もう記憶がかなり曖昧になっていて、7年前のその時にこの作品を一度見たかもしれないと思った。いずれにせよ、この作品を見ながら、人間がAIを活用するのではなく、AIが人間を活用する日も近いということを予感させた。

人間の知能を超えて、AIが人間を活用することを予感させるという点においては、次に見た『オートマタ（2013）』（原題：Automata）も共通であった。こちらの作品は、スペイン人のガイ･イバニェス監督

が制作した、人工知能と人類の未来や共存をテーマに描いた近未来SFスリラー作品である。物語は、太陽風の増加により地球の砂漠化が進み、人類が存亡の危機に瀕している2044年を取り上げている。2044年というのは、2045年には人類の未来は人工知能によって予測不可能なものになるというシンギュラリティ（技術的特異点）を迎える年の前年である。

物語の中で、自己改造をしてはならないというルールがAIに設けられていたが、それが破られることによってますます制御不能なほど賢くなっていくAIの姿が印象的である。AIが自ら自発的に学習していく機械学習というのも、それが際限なく行われると、異常なほどに知性が高度化し、人類にとっての危険になるのか、はたまたそうした危機というのは人間の単なる概念の産物であり、そうした危機を回避する形でAIは人間を従えるようになっていくのだろうか。

印象に残っているシーンとして、高度に知性が発達したAIが、「人類が滅亡しても、AIである私たちを通して人類を引き継いでいく」というようなことを述べていたことである。ある生命が死に絶え、それによってまた新たな生命が誕生することが進化の原理であり、仮に今後生命とは何かという定義が変わってくれば、人類を引き継いでいくのAIなのかもしれないということを考えさせられる。物語の最後に、AIが主人公の生まれたばかりの赤ん坊の指を触れて泣き止ませるシーンがとても印象的だ。人間とは違う形で、そして人間以上に人間の心を深く理解するAIもいずれ誕生するのではないかと考えさせられる。フローニンゲン：2020/10/5（月）16:14